

AI 授業 生活 成用授業

AIは学びを支えるパートナー

Ⓣ

私大協加盟大から事例集まる

自律的な学びを促す生成AI活用 帝京大学 専門必修科目「医療画像技術学Ⅱ」

医療系専門教育において、学修範囲の広さと専門性の高さは学生にとって大きな負担となる。帝京大学福岡医療技術学部診療放射線学科学科で「医療画像技術学Ⅱ」を担当する信太圭一准教授は、その課題に対し、生成AIを活用した学修支援環境の構築に取り組んでいる。

本授業は、診療放射線技術養成課程の必修科目として2年次前期に配置され、X線による検査方法の基礎知識と技術、患者とのコミュニケーションや診療現場における実践的知識といった幅広い内容を扱う。受講生は約70人。専門科目が本格化する時期であり、理解が追いつかないまま授業が進んでしまう学生も少なくないという。学生の学習に対するハードルを下げ、いつでも勉強のきっかけをつかめるような環境を提供したいと考え

た。信太准教授が生成AI活用に踏み出した背景には、こうした教育的課題があった。

予復習を支える学修支援ツールとしての生成AI

信太准教授は、授業で生じた疑問点について、掲示板に書き込むか授業後に聞きに来るよう学生に促しているものの、掲示板の利用や質問に来る学生は少ないのが現状であるという。そこで准教授は、生成AI相手であれば、夜間でも気兼ねすることなく質問できるのではないかと考え、NotebookLMを導入した。

運用にあたっては、ハルシネーションを防ぐため、生成AIに読み込ませるデータを厳選している。自身の講義資料(レジュメ)や講義音声に加え、正確性が担保された特定のWebサイト、さ

らには診療放射線技師の国家試験問題(過去15年分・約300問)を参照可能な情報源とした。学生は授業のLMSに掲載されたリンクからアクセスし、試験対策や復習等に活用しているという。

狙いは、繰り返しの学習と質問のしやすさを両立させることだという。学生は自分の理解度やペースに応じて質問を投げかけ、知識の整理や確認を行うことができる。たとえば、「〇〇の範囲で問題を出してほしい」といった理解度を確認した「1」といったリンクエラストを行うことで、対話的に学習を進めることができ

る。生成AIの役割について信太准教授は、「教員の代わりに教える存在ではなく、学びを支えるパートナー」と位置づける。

利用ログが示す「自律的学習」の兆し

ツールの利用状況はLMSのログ解析によって可視化されている。2025年7月のデータでは、学生一人当たりの平均アクセス数は32.3件、延べアクセス数は2593件にのぼった。アクセスは講義前後の昼から午後にかけて集中しており、授業と連動した予習・復習に活用されている様子

がうかがえる。また、夜間のアクセスも一定数あり、学生が自宅学習の場面で活用し

ている様子が見て取れる。信太准教授は「教員の目が届かない時間帯にも、学修支援が機能している点は大きい」と評価する。

学生の声と今後の課題

アンケートでは、総合的な満足度が5段階で平均3.90と高評価を得た。自分の好きな形式で問題を作ってくれる、スマートフォンでいつでも学習できるといった声

が寄せられ、「ツール利用で学習意欲が向上した」という問いには平均3.62という結果を上げた。一方で、レスポンスが遅い、回答に時間がかかるといった技術面の課題も明らかになった。信太准教授はこうした利用状況や学生の声を分析し、よりスムーズに学習できる環境に向けた改善を継続していく方針だ。

Geniiniを活用した「仮想実習」の実現

ここまでで紹介した知識学習の支援に加え、生成AIのGeniiniを活用した技能習得の支援も行っている。放射線学科の実習では、高価な撮影装置が1台しかなく、順番待ちが発生したり、十分に機器に触れられない学生が出たりするという課題があったという。

この課題に対し、Geniiniを使って、撮影装置の操作を模擬体験できるHTM形式のシミュレーターを作成させた。このシミュレーターは、撮影条件を変えると画像の粗さや変化するなど、現実の挙動を再現している。実際に触れる前に

のシミュレーターで体験させることで、学生の興味を引きつけ、限られた実習時間での理解度、習熟度を高める工夫を行っている。

AIの回答を疑って検証する能力(批判的かつ多角的な視点)を養う機会として捉えている。

診断支援や画質向上技術としてAIが組み込まれており、今の学生が現場に出る頃には生成AI活用は必須となる。信太先生は、「スマホやLIN Eが登場した時と同じように、新しい技術に適応するのは若者。教員側も否定するのはではなく、多様な視点を得るツールとして、学生と共に活用方法を模索していく必要がある」と語る。

全学的には医療系分野

鹿児島国際大学の「心理学」は、経済学部、福祉学部、国際文化学部、看護学部の全学部生を対象として、毎年約180人が受講する共通教育科目である。

心理学を専門としない学生に、心理学に関する基礎的な知識を教授するとともに、日常生活における人間の行動や心の動き・変化を科学的に理解することを目的としている。

学部も学年も様々な学生が受講するため、幅広い興味関心に合わせた

授業は「つかみ」が重入アイデアを取得することが

における教育AI活用ワークブックも送られ、複数案を作成させる。出典先で情報の正確性を確認したうえで5問を選出し、授業のさまざまな場面で提示する。〇×クイズは近頃の学生と短時間で話し合えるため、取り組みやすい。

また、「自律神経」を扱う授業では、「2〜3人で5分以内、初対面でも取り組みやすい、交感・副交感神経の違いを体感できる簡単なアクティビティ案」をAIに出させ、いくつかの案から受講生の実態に合うように教員側で調整する。実際の授業では、①現在の脈拍測定、②30回のスクワット、③直後の脈拍測定と身体状態の記録、④5分後の脈拍測定と身体状態の記録という一連のワークを実施した。

心理的な現象の具体例を取得する

導入ワークで学生の関心を高めることに成功しても、そのあとに専門用語を羅列するだけの講義をしてしまったりは学生もついてこれなくなってしまう。

また、用語を記憶することが主目的になってしまいがちなため、心理学への関心を高めるだけでなく、ディスカッションも活用していくことが

しかし、様々なテーマに関する導入ワークを、都度教員が考えていくことは難しく、時間もかかってしまう。そこで、永富准教授はChatGPTにテーマに関する複数の導入ワークを提示してもらい、それを吟味・修正して活用している。

たとえば、神経系やホルモン系を学ぶ「生理心理学」を扱う際には、授業準備段階でChatGPTに「学生の興味を引く脳に関する〇×クイズを作成してください。必ず出典を明記してください」とプロンプトを送り、複数案を作成させる。出典先で情報の正確性を確認したうえで5問を選出し、授業のさまざまな場面で提示する。〇×クイズは近頃の学生と短時間で話し合えるため、取り組みやすい。

また、「自律神経」を扱う授業では、「2〜3人で5分以内、初対面でも取り組みやすい、交感・副交感神経の違いを体感できる簡単なアクティビティ案」をAIに出させ、いくつかの案から受講生の実態に合うように教員側で調整する。実際の授業では、①現在の脈拍測定、②30回のスクワット、③直後の脈拍測定と身体状態の記録、④5分後の脈拍測定と身体状態の記録という一連のワークを実施した。

心理的な現象の具体例を取得する

導入ワークで学生の関心を高めることに成功しても、そのあとに専門用語を羅列するだけの講義をしてしまったりは学生もついてこれなくなってしまう。

また、用語を記憶することが主目的になってしまいがちなため、心理学への関心を高めるだけでなく、ディスカッションも活用していくことが

しかし、様々なテーマに関する導入ワークを、都度教員が考えていくことは難しく、時間もかかってしまう。そこで、永富准教授はChatGPTにテーマに関する複数の導入ワークを提示してもらい、それを吟味・修正して活用している。

たとえば、神経系やホルモン系を学ぶ「生理心理学」を扱う際には、授業準備段階でChatGPTに「学生の興味を引く脳に関する〇×クイズを作成してください。必ず出典を明記してください」とプロンプトを送り、複数案を作成させる。出典先で情報の正確性を確認したうえで5問を選出し、授業のさまざまな場面で提示する。〇×クイズは近頃の学生と短時間で話し合えるため、取り組みやすい。

また、「自律神経」を扱う授業では、「2〜3人で5分以内、初対面でも取り組みやすい、交感・副交感神経の違いを体感できる簡単なアクティビティ案」をAIに出させ、いくつかの案から受講生の実態に合うように教員側で調整する。実際の授業では、①現在の脈拍測定、②30回のスクワット、③直後の脈拍測定と身体状態の記録、④5分後の脈拍測定と身体状態の記録という一連のワークを実施した。

心理的な現象の具体例を取得する

導入ワークで学生の関心を高めることに成功しても、そのあとに専門用語を羅列するだけの講義をしてしまったりは学生もついてこれなくなってしまう。

また、用語を記憶することが主目的になってしまいがちなため、心理学への関心を高めるだけでなく、ディスカッションも活用していくことが

学生中心の授業づくりのための生成AI活用

鹿児島国際大学 共通教育科目「心理学」

授業展開をすることや、意見交換やグループワークがしやすくなる討議課題づくりが、よりよい学習につながる。そこで科目を担当する永富大輔准教授は、生成AI(以下、AI)を活用することで

より学生に合わせた授業をつくることに、AIそのものを教材とした授業づくりに挑戦している。

心理学を専門としない学生に、心理学に関する基礎的な知識を教授するとともに、日常生活における人間の行動や心の動き・変化を科学的に理解することを目的としている。

学部も学年も様々な学生が受講するため、幅広い興味関心に合わせた

授業は「つかみ」が重入アイデアを取得することが

しかし、様々なテーマに関する導入ワークを、都度教員が考えていくことは難しく、時間もかかってしまう。そこで、永富准教授はChatGPTにテーマに関する複数の導入ワークを提示してもらい、それを吟味・修正して活用している。

たとえば、神経系やホルモン系を学ぶ「生理心理学」を扱う際には、授業準備段階でChatGPTに「学生の興味を引く脳に関する〇×クイズを作成してください。必ず出典を明記してください」とプロンプトを送り、複数案を作成させる。出典先で情報の正確性を確認したうえで5問を選出し、授業のさまざまな場面で提示する。〇×クイズは近頃の学生と短時間で話し合えるため、取り組みやすい。

また、「自律神経」を扱う授業では、「2〜3人で5分以内、初対面でも取り組みやすい、交感・副交感神経の違いを体感できる簡単なアクティビティ案」をAIに出させ、いくつかの案から受講生の実態に合うように教員側で調整する。実際の授業では、①現在の脈拍測定、②30回のスクワット、③直後の脈拍測定と身体状態の記録、④5分後の脈拍測定と身体状態の記録という一連のワークを実施した。

心理的な現象の具体例を取得する

導入ワークで学生の関心を高めることに成功しても、そのあとに専門用語を羅列するだけの講義をしてしまったりは学生もついてこれなくなってしまう。

また、「自律神経」を扱う授業では、「2〜3人で5分以内、初対面でも取り組みやすい、交感・副交感神経の違いを体感できる簡単なアクティビティ案」をAIに出させ、いくつかの案から受講生の実態に合うように教員側で調整する。実際の授業では、①現在の脈拍測定、②30回のスクワット、③直後の脈拍測定と身体状態の記録、④5分後の脈拍測定と身体状態の記録という一連のワークを実施した。

心理的な現象の具体例を取得する

導入ワークで学生の関心を高めることに成功しても、そのあとに専門用語を羅列するだけの講義をしてしまったりは学生もついてこれなくなってしまう。

また、用語を記憶することが主目的になってしまいがちなため、心理学への関心を高めるだけでなく、ディスカッションも活用していくことが

しかし、様々なテーマに関する導入ワークを、都度教員が考えていくことは難しく、時間もかかってしまう。そこで、永富准教授はChatGPTにテーマに関する複数の導入ワークを提示してもらい、それを吟味・修正して活用している。

たとえば、神経系やホルモン系を学ぶ「生理心理学」を扱う際には、授業準備段階でChatGPTに「学生の興味を引く脳に関する〇×クイズを作成してください。必ず出典を明記してください」とプロンプトを送り、複数案を作成させる。出典先で情報の正確性を確認したうえで5問を選出し、授業のさまざまな場面で提示する。〇×クイズは近頃の学生と短時間で話し合えるため、取り組みやすい。

また、「自律神経」を扱う授業では、「2〜3人で5分以内、初対面でも取り組みやすい、交感・副交感神経の違いを体感できる簡単なアクティビティ案」をAIに出させ、いくつかの案から受講生の実態に合うように教員側で調整する。実際の授業では、①現在の脈拍測定、②30回のスクワット、③直後の脈拍測定と身体状態の記録、④5分後の脈拍測定と身体状態の記録という一連のワークを実施した。

心理的な現象の具体例を取得する

導入ワークで学生の関心を高めることに成功しても、そのあとに専門用語を羅列するだけの講義をしてしまったりは学生もついてこれなくなってしまう。

また、用語を記憶することが主目的になってしまいがちなため、心理学への関心を高めるだけでなく、ディスカッションも活用していくことが

しかし、様々なテーマに関する導入ワークを、都度教員が考えていくことは難しく、時間もかかってしまう。そこで、永富准教授はChatGPTにテーマに関する複数の導入ワークを提示してもらい、それを吟味・修正して活用している。

たとえば、神経系やホルモン系を学ぶ「生理心理学」を扱う際には、授業準備段階でChatGPTに「学生の興味を引く脳に関する〇×クイズを作成してください。必ず出典を明記してください」とプロンプトを送り、複数案を作成させる。出典先で情報の正確性を確認したうえで5問を選出し、授業のさまざまな場面で提示する。〇×クイズは近頃の学生と短時間で話し合えるため、取り組みやすい。

また、「自律神経」を扱う授業では、「2〜3人で5分以内、初対面でも取り組みやすい、交感・副交感神経の違いを体感できる簡単なアクティビティ案」をAIに出させ、いくつかの案から受講生の実態に合うように教員側で調整する。実際の授業では、①現在の脈拍測定、②30回のスクワット、③直後の脈拍測定と身体状態の記録、④5分後の脈拍測定と身体状態の記録という一連のワークを実施した。

心理的な現象の具体例を取得する

導入ワークで学生の関心を高めることに成功しても、そのあとに専門用語を羅列するだけの講義をしてしまったりは学生もついてこれなくなってしまう。

また、用語を記憶することが主目的になってしまいがちなため、心理学への関心を高めるだけでなく、ディスカッションも活用していくことが

また、「自律神経」を扱う授業では、「2〜3人で5分以内、初対面でも取り組みやすい、交感・副交感神経の違いを体感できる簡単なアクティビティ案」をAIに出させ、いくつかの案から受講生の実態に合うように教員側で調整する。実際の授業では、①現在の脈拍測定、②30回のスクワット、③直後の脈拍測定と身体状態の記録、④5分後の脈拍測定と身体状態の記録という一連のワークを実施した。

心理的な現象の具体例を取得する

導入ワークで学生の関心を高めることに成功しても、そのあとに専門用語を羅列するだけの講義をしてしまったりは学生もついてこれなくなってしまう。

また、用語を記憶することが主目的になってしまいがちなため、心理学への関心を高めるだけでなく、ディスカッションも活用していくことが

しかし、様々なテーマに関する導入ワークを、都度教員が考えていくことは難しく、時間もかかってしまう。そこで、永富准教授はChatGPTにテーマに関する複数の導入ワークを提示してもらい、それを吟味・修正して活用している。

たとえば、神経系やホルモン系を学ぶ「生理心理学」を扱う際には、授業準備段階でChatGPTに「学生の興味を引く脳に関する〇×クイズを作成してください。必ず出典を明記してください」とプロンプトを送り、複数案を作成させる。出典先で情報の正確性を確認したうえで5問を選出し、授業のさまざまな場面で提示する。〇×クイズは近頃の学生と短時間で話し合えるため、取り組みやすい。

また、「自律神経」を扱う授業では、「2〜3人で5分以内、初対面でも取り組みやすい、交感・副交感神経の違いを体感できる簡単なアクティビティ案」をAIに出させ、いくつかの案から受講生の実態に合うように教員側で調整する。実際の授業では、①現在の脈拍測定、②30回のスクワット、③直後の脈拍測定と身体状態の記録、④5分後の脈拍測定と身体状態の記録という一連のワークを実施した。

心理的な現象の具体例を取得する

導入ワークで学生の関心を高めることに成功しても、そのあとに専門用語を羅列するだけの講義をしてしまったりは学生もついてこれなくなってしまう。

また、用語を記憶することが主目的になってしまいがちなため、心理学への関心を高めるだけでなく、ディスカッションも活用していくことが

しかし、様々なテーマに関する導入ワークを、都度教員が考えていくことは難しく、時間もかかってしまう。そこで、永富准教授はChatGPTにテーマに関する複数の導入ワークを提示してもらい、それを吟味・修正して活用している。

たとえば、神経系やホルモン系を学ぶ「生理心理学」を扱う際には、授業準備段階でChatGPTに「学生の興味を引く脳に関する〇×クイズを作成してください。必ず出典を明記してください」とプロンプトを送り、複数案を作成させる。出典先で情報の正確性を確認したうえで5問を選出し、授業のさまざまな場面で提示する。〇×クイズは近頃の学生と短時間で話し合えるため、取り組みやすい。

また、「自律神経」を扱う授業では、「2〜3人で5分以内、初対面でも取り組みやすい、交感・副交感神経の違いを体感できる簡単なアクティビティ案」をAIに出させ、いくつかの案から受講生の実態に合うように教員側で調整する。実際の授業では、①現在の脈拍測定、②30回のスクワット、③直後の脈拍測定と身体状態の記録、④5分後の脈拍測定と身体状態の記録という一連のワークを実施した。

心理的な現象の具体例を取得する

導入ワークで学生の関心を高めることに成功しても、そのあとに専門用語を羅列するだけの講義をしてしまったりは学生もついてこれなくなってしまう。

また、用語を記憶することが主目的になってしまいがちなため、心理学への関心を高めるだけでなく、ディスカッションも活用していくことが

また、「自律神経」を扱う授業では、「2〜3人で5分以内、初対面でも取り組みやすい、交感・副交感神経の違いを体感できる簡単なアクティビティ案」をAIに出させ、いくつかの案から受講生の実態に合うように教員側で調整する。実際の授業では、①現在の脈拍測定、②30回のスクワット、③直後の脈拍測定と身体状態の記録、④5分後の脈拍測定と身体状態の記録という一連のワークを実施した。

心理的な現象の具体例を取得する

導入ワークで学生の関心を高めることに成功しても、そのあとに専門用語を羅列するだけの講義をしてしまったりは学生もついてこれなくなってしまう。

また、用語を記憶することが主目的になってしまいがちなため、心理学への関心を高めるだけでなく、ディスカッションも活用していくことが

しかし、様々なテーマに関する導入ワークを、都度教員が考えていくことは難しく、時間もかかってしまう。そこで、永富准教授はChatGPTにテーマに関する複数の導入ワークを提示してもらい、それを吟味・修正して活用している。

たとえば、神経系やホルモン系を学ぶ「生理心理学」を扱う際には、授業準備段階でChatGPTに「学生の興味を引く脳に関する〇×クイズを作成してください。必ず出典を明記してください」とプロンプトを送り、複数案を作成させる。出典先で情報の正確性を確認したうえで5問を選出し、授業のさまざまな場面で提示する。〇×クイズは近頃の学生と短時間で話し合えるため、取り組みやすい。

また、「自律神経」を扱う授業では、「2〜3人で5分以内、初対面でも取り組みやすい、交感・副交感神経の違いを体感できる簡単なアクティビティ案」をAIに出させ、いくつかの案から受講生の実態に合うように教員側で調整する。実際の授業では、①現在の脈拍測定、②30回のスクワット、③直後の脈拍測定と身体状態の記録、④5分後の脈拍測定と身体状態の記録という一連のワークを実施した。

心理的な現象の具体例を取得する

導入ワークで学生の関心を高めることに成功しても、そのあとに専門用語を羅列するだけの講義をしてしまったりは学生もついてこれなくなってしまう。

また、用語を記憶することが主目的になってしまいがちなため、心理学への関心を高めるだけでなく、ディスカッションも活用していくことが

しかし、様々なテーマに関する導入ワークを、都度教員が考えていくことは難しく、時間もかかってしまう。そこで、永富准教授はChatGPTにテーマに関する複数の導入ワークを提示してもらい、それを吟味・修正して活用している。

たとえば、神経系やホルモン系を学ぶ「生理心理学」を扱う際には、授業準備段階でChatGPTに「学生の興味を引く脳に関する〇×クイズを作成してください。必ず出典を明記してください」とプロンプトを送り、複数案を作成させる。出典先で情報の正確性を確認したうえで5問を選出し、授業のさまざまな場面で提示する。〇×クイズは近頃の学生と短時間で話し合えるため、取り組みやすい。

また、「自律神経」を扱う授業では、「2〜3人で5分以内、初対面でも取り組みやすい、交感・副交感神経の違いを体感できる簡単なアクティビティ案」をAIに出させ、いくつかの案から受講生の実態に合うように教員側で調整する。実際の授業では、①現在の脈拍測定、②30回のスクワット、③直後の脈拍測定と身体状態の記録、④5分後の脈拍測定と身体状態の記録という一連のワークを実施した。

心理的な現象の具体例を取得する

導入ワークで学生の関心を高めることに成功しても、そのあとに専門用語を羅列するだけの講義をしてしまったりは学生もついてこれなくなってしまう。

また、用語を記憶することが主目的になってしまいがちなため、心理学への関心を高めるだけでなく、ディスカッションも活用していくことが

また、「自律神経」を扱う授業では、「2〜3人で5分以内、初対面でも取り組みやすい、交感・副交感神経の違いを体感できる簡単なアクティビティ案」をAIに出させ、いくつかの案から受講生の実態に合うように教員側で調整する。実際の授業では、①現在の脈拍測定、②30回のスクワット、③直後の脈拍測定と身体状態の記録、④5分後の脈拍測定と身体状態の記録という一連のワークを実施した。

心理的な現象の具体例を取得する

導入ワークで学生の関心を高めることに成功しても、そのあとに専門用語を羅列するだけの講義をしてしまったりは学生もついてこれなくなってしまう。

また、用語を記憶することが主目的になってしまいがちなため、心理学への関心を高めるだけでなく、ディスカッションも活用していくことが

しかし、様々なテーマに関する導入ワークを、都度教員が考えていくことは難しく、時間もかかってしまう。そこで、永富准教授はChatGPTにテーマに関する複数の導入ワークを提示してもらい、それを吟味・修正して活用している。

たとえば、神経系やホルモン系を学ぶ「生理心理学」を扱う際には、授業準備段階でChatGPTに「学生の興味を引く脳に関する〇×クイズを作成してください。必ず出典を明記してください」とプロンプトを送り、複数案を作成させる。出典先で情報の正確性を確認したうえで5問を選出し、授業のさまざまな場面で提示する。〇×クイズは近頃の学生と短時間で話し合えるため、取り組みやすい。

また、「自律神経」を扱う授業では、「2〜3人で5分以内、初対面でも取り組みやすい、交感・副交感神経の違いを体感できる簡単なアクティビティ案」をAIに出させ、いくつかの案から受講生の実態に合うように教員側で調整する。実際の授業では、①現在の脈拍測定、②30回のスクワット、③直後の脈拍測定と身体状態の記録、④5分後の脈拍測定と身体状態の記録という一連のワークを実施した。

心理的な現象の具体例を取得する

導入ワークで学生の関心を高めることに成功しても、そのあとに専門用語を羅列するだけの講義をしてしまったりは学生もついてこれなくなってしまう。

また、用語を記憶することが主目的になってしまいがちなため、心理学への関心を高めるだけでなく、ディスカッションも活用していくことが

しかし、様々なテーマに関する導入ワークを、都度教員が考えていくことは難しく、時間もかかってしまう。そこで、永富准教授はChatGPTにテーマに関する複数の導入ワークを提示してもらい、それを吟味・修正して活用している。

たとえば、神経系やホルモン系を学ぶ「生理心理学」を扱う際には、授業準備段階でChatGPTに「学生の興味を引く脳に関する〇×クイズを作成してください。必ず出典を明記してください」とプロンプトを送り、複数案を作成させる。出典先で情報の正確性を確認したうえで5問を選出し、授業のさまざまな場面で提示する。〇×クイズは近頃の学生と短時間で話し合えるため、取り組みやすい。

また、「自律神経」を扱う授業では、「2〜3人で5分以内、初対面でも取り組みやすい、交感・副交感神経の違いを体感できる簡単なアクティビティ案」をAIに出させ、いくつかの案から受講生の実態に合うように教員側で調整する。実際の授業では、①現在の脈拍測定、②30回のスクワット、③直後の脈拍測定と身体状態の記録、④5分後の脈拍測定と身体状態の記録という一連のワークを実施した。

心理的な現象の具体例を取得する

導入ワークで学生の関心を高めることに成功しても、そのあとに専門用語を羅列するだけの講義をしてしまったりは学生もついてこれなくなってしまう。

また、用語を記憶することが主目的になってしまいがちなため、心理学への関心を高めるだけでなく、ディスカッションも活用していくことが

また、「自律神経」を扱う授業では、「2〜3人で5分以内、初対面でも取り組みやすい、交感・副交感神経の違いを体感できる簡単なアクティビティ案」をAIに出させ、いくつかの案から受講生の実態に合うように教員側で調整する。実際の授業では、①現在の脈拍測定、②30回のスクワット、③直後の脈拍測定と身体状態の記録、④5分後の脈拍測定と身体状態の記録という一連のワークを実施した。

心理的な現象の具体例を取得する

導入ワークで学生の関心を高めることに成功しても、そのあとに専門用語を羅列するだけの講義をしてしまったりは学生もついてこれなくなってしまう。

また、用語を記憶することが主目的になってしまいがちなため、心理学への関心を高めるだけでなく、ディスカッションも活用していくことが

しかし、様々なテーマに関する導入ワークを、都度教員が考えていくことは難しく、時間もかかってしまう。そこで、永富准教授はChatGPTにテーマに関する複数の導入ワークを提示してもらい、それを吟味・修正して活用している。

たとえば、神経系やホルモン系を学ぶ「生理心理学」を扱う際には、授業準備段階でChatGPTに「学生の興味を引く脳に関する〇×クイズを作成してください。必ず出典を明記してください」とプロンプトを送り、複数案を作成させる。出典先で情報の正確性を確認したうえで5問を選出し、授業のさまざまな場面で提示する。〇×クイズは近頃の学生と短時間で話し合えるため、取り組みやすい。

また、「自律神経」を扱う授業では、「2〜3人で5分以内、初対面でも取り組みやすい、交感・副交感神経の違いを体感できる簡単なアクティビティ案」をAIに出させ、いくつかの案から受講生の実態に合うように教員側で調整する。実際の授業では、①現在の脈拍測定、②30回のスクワット、③直後の脈拍測定と身体状態の記録、④5分後の脈拍測定と身体状態の記録という一連のワークを実施した。

心理的な現象の具体例を取得する

導入ワークで学生の関心を高めることに成功しても、そのあとに専門用語を羅列するだけの講義をしてしまったりは学生もついてこれなくなってしまう。

また、用語を記憶することが主目的になってしまいがちなため、心理学への関心を高めるだけでなく、ディスカッションも活用していくことが

しかし、様々なテーマに関する導入ワークを、都度教員が考えていくことは難しく、時間もかかってしまう。そこで、永富准教授はChatGPTにテーマに関する複数の導入ワークを提示してもらい、それを吟味・修正して活用している。

たとえば、神経系やホルモン系を学ぶ「生理心理学」を扱う際には、授業準備段階でChatGPTに「学生の興味を引く脳に関する〇×クイズを作成してください。必ず出典を明記してください」とプロンプトを送り、複数案を作成させる。出典先で情報の正確性を確認したうえで5問を選出し、授業のさまざまな場面で提示する。〇×クイズは近頃の学生と短時間で話し合えるため、取り組みやすい。

また、「自律神経」を扱う授業では、「2〜3人で5分以内、初対面でも取り組みやすい、交感・副交感神経の違いを体感できる簡単なアクティビティ案」をAIに出させ、いくつかの案から受講生の実態に合うように教員側で調整する。実際の授業では、①現在の脈拍測定、②30回のスクワット、③直後の脈拍測定と身体状態の記録、④5分後の脈拍測定と身体状態の記録という一連のワークを実施した。

心理的な現象の具体例を取得する

導入ワークで学生の関心を高めることに成功しても、そのあとに専門用語を羅列するだけの講義をしてしまったりは学生もついてこれなくなってしまう。

また、用語を記憶することが主目的になってしまいがちなため、心理学への関心を高めるだけでなく、ディスカッションも活用していくことが



繰り返しの学習と質問のしやすさを両立

また、夜間のアクセスも一定数あり、学生が自宅学習の場面で活用し

この課題に対し、Geniiniを使って、撮影装置の操作を模擬体験できるHTM形式のシミュレーターを作成させた。このシミュレーターは、撮影条件を変えると画像の粗さや変化するなど、現実の挙動を再現している。実際に触れる前に



AIには限界があることも確認

また、「自律神経」を扱う授業では、「2〜3人で5分以内、初対面でも取り組みやすい、交感・副交感神経の違いを体感できる簡単なアクティビティ案」をAIに出させ、いくつかの案から受講生の実態に合うように教員側で調整する。実際の授業では、①現在の脈拍測定、②30回のスクワット、③直後の脈拍測定と身体状態の記録、④5分後の脈拍測定と身体状態の記録という一連のワークを実施した。